

核廃止運動

東洋町・文獻調査申請 下

二月二日夜、東洋町甲浦 浮上して以降、反対派は数の白浜集会所の窓から、暁の上でも運動量でも賛成派々と明かりが漏れていた。を、圧倒して来た。

高レベル放射性廃棄物最終処分施設の誘致に反対する 昨年十二月から中学生以上を対象に集めた反対署名同地区住民らの会合だ。は、町人口の63%を占めた。約九十人が車座になった。田嶋町長が候補地への室内には、田嶋裕起町長に応募を表明した後、反対派に対する怒りがみなぎっていた。は放射性廃棄物拒否条例の直接請求へ向けわずか七日

届かぬ反対の声

「あの町長がおる限り事業は止まんらん」「リコー（解職請求）しかない。みんな、やろう！」

最終手段への決意を語る住民たち。あちこちで賛同の音が上がり、うなずき合い、大きな拍手が起った。

「押されゆづ」

確かに、核廃施設問題が

住民間に深い「亀裂」



約百人が参加した反対派の決起集会。「核のこみはいらぬ」と訴えた（2月13日、東洋町役場前）

推進派のペースで事は進んでいる。「国側は反対の声を聞いているのか」。反対派グループの住民は無力感をにじませる。

そしてもう一つは、今後展開すべき反対運動の見通しが定まらないという不安感がある。

押されゆづ...」運動が後れることに対する焦りがある。後手に回りゆづとの。田嶋町長が候補地への声が届かぬ。なぜなのか。応募を表明して以降、原子力発電環境整備機構の応募理由の一つは、反対の声

にもかかわらず、反対派とは裏腹に、文獻調査へ向けて淡々と手続きが進められてきた。調査の認可申請と、終始、

例案可決には三分の二（七人の反対が必要となり）転、否決となる。

「あの町長やったら絶対、再議になる」法律は権力側の都合のえいようにできちゆう...」反対派住民はやりきれない思いをぶつける。

またリコールに打って出た場合、その後の新町長を選挙で選挙に反対派の候補として誰を擁立するか。それも決まっていなのが実情だ。

窪川と同じ道？

「田嶋町長は議会や住民の十分な理解を得ないまま案を提出することになる。町を二分するよくな状況になっているの」に、国が認可を出すような国の原子力政策への不信感が高まるだけだ

「東洋町は今、あの時の窪川町と同じ道の、入り口にいるのではないか」「泥沼に向かいゆづ」

しかし、町長が議決に異議を唱え審議のやり直し請求代表者、弘田祐一さん（再議）を求めた場合、条（六九）生見は声を荒らげ

（聖言支局・海路佳孝）

る。

自営業の町民らは「お客さん」話す時、「この人は賛成、反対、どっちの立場の人やろか」と考えてしまふ。うかつに核廃施設の話をできん...」とつぶやく。

今後の展開はまだ不明な部分が多い。しかし、処理という国策は、住民の間に深い亀裂を生んでいることは間違いない。

この状況は、かつて原発立地をめぐる町を二分する騒動が長く続いた窪川町（現四万十町）のケースを思い起こさせる。賛否を異にし、骨肉の争い、となつた親子がいた。賛成派の住民は反対派の商店の品を買わなくなった。そのしこりは立地計画が消えた後も残った...